普及課だより

2026.1 月号 No.68

東三河農林水産事務所農業改良普及課
（東三河農業普及指導センター）

〒440-0806　豊橋市八町通５丁目４(東三河総合庁舎４階)
TEL：(0532)35-6550～6554　FAX：(0532)57-5070
E-mail:higashimikawa-fukyu@pref.aichi.lg.jp
Web　下記ページで農業改良普及課を Click
https://www.pref.aichi.jp/soshiki/higashimikawa-nourin/

あけましておめでとうございます　　課長　鈴木 潤

旧年中は農業改良普及事業に格別の御支援、御協力いただきましたことに厚く御礼申し上げます。

昨年は２年続きの記録的な猛暑となり、気候変動が農畜産物の生産量や品質に深刻な影響を及ぼすようになりました。また、農業者の高齢化と担い手不足、生産コストの上昇、農畜産物への価格転嫁が進まないことなど、農業を取り巻く環境は厳しさを増しています。一方で、地域の農業を担う人材を支援する動きが現れており、気候変動に対応した技術やスマート農業技術の導入が始まっています。

こうした現状に対応するため、農業改良普及課では、次期普及指導基本計画（計画期間 2026 年度～2030 年度）の三本柱として「次世代の農業を担う新規就農者の定着」、「技術改良による農業経営の安定」、「気候変動に対応した技術の普及」を目標に掲げました。

本年も生産現場のニーズに即した普及指導活動を展開し、スピード感を持って問題解決に取り組んで参りますので、引き続き皆様の御支援、御協力をお願いいたします。

管　内　農　業　の　話　題

農業経営士が農林漁業を活かした「地域おこし」を学びました

愛知県農業経営士協会東三河支部（竹生佳永支部長）は、地域活性化の実践事例を学ぶことを目的に、10 月 29 日に蒲郡市内で研修会を開催し、会員 58 名が参加しました。

東海農政局次長の福井逸人氏を講師に迎え、これまで赴任した各自治体での農林漁業の魅力を活かした地域おこしの具体的取組について、ユーモアやジェスチャーを交えて紹介してもらいました。講演の中では笑いがあふれる場面も多く、会場は終始和やかな雰囲気に包まれていました。

参加者からは「楽しく学べた」「地域農業の可能性を再認識できた」といった声が聞かれ、農業経営士として今後の経営に活かせる新たな視点を得る、非常に有意義な機会となりました。

研修会の様子

管　内　農　業　の　話　題

11 年ぶりに次郎柿品評会を開催

JA豊橋柿部会は、2025 年に豊橋市で次郎柿生誕 111 周年を迎えるにあたり、販売促進の一環として、11 年ぶりに次郎柿品評会（JIRO-1 グランプリ）を開催しました。

品評会には、次郎柿 64 点が出品されました。2025 年は、夏季高温の影響で小玉傾向となりましたが、生産者の栽培努力により、高品質な果実が出品されました。平均糖度は 16.5 度、最高糖度は 18.9 度でした。

特選5点の中から、最も優れた柿が「KING OF JIRO」に選ばれました。さらに、通常とは異なる形状で外観がユニークな次郎柿 37 点から、「おもしろ柿大賞」が選ばれました。

「KING OF JIRO」に選ばれた柿

6 年ぶり、水田作技術研究会開催

12 月 9 日、生産者や関係者への水田作の新技術の紹介と生産者間の情報交換を目的に、「東三河水田作技術研究会」を開催し、43 名が参加しました。コロナ禍の影響で途絶えていましたが、JA 豊橋の協力を得て、6 年ぶりの開催となりました。

今回は、水稲の高温対策をテーマに、高温に強いコメ5品種の食べ比べをしました。1位は豊橋産の「にこまる」で、「甘みが強く、粒がしっかりしておいしい」という感想が聞かれました。2位は豊橋産「コシヒカリ」、3位は愛知県産「あいちのこころ」が僅差で続きました。食味会後の研修会では、管内で栽培した高温耐性品種の特徴や、高温に対応した肥料の試験結果を紹介しました。

５品種の食べ比べをする参加者

新　品　種　に　関　す　る　紹　介

イチゴ新品種「愛きらり®」の生産拡大

「愛きらり®」は、愛知県が育成した新品種で、2024 年度作から本格生産が始まりました。2025 年度作はさらに生産を拡大し、JA 豊橋及び JA ひまわりで 102 名の生産者が 15ha（県内作付面積 22ha）で栽培しています。

今年度作は、育苗期の高温対策の取組や 9 月下旬に夜温が下がったことにより、頂果房の花芽分化が順調で、出蕾も揃いました。出荷は、夜冷作型が 10 月下旬から、普通作型が 11 月中旬から始まっており、順調なスタートとなりました。また、2 番果房の開花、着果も順調です。

今後は、市場から求められる品質レベルの維持、安定出荷に向け、栽培管理技術の改善と普及に取り組みます。

ほ場の様子

新しい技術への取組紹介

果梗捻枝によるトマトの高温対策

果梗捻枝とは、トマトの一番果の果実肥大が終わる頃に茎(果梗)をペンチなどで潰すことで、過剰な養水分の流入を物理的に防ぎ裂果を抑える技術です。

当初は大切に育てたトマトの茎を潰すという作業に抵抗を感じる生産者もいました。しかし、現地指導や展示ほの情報共有によって、試験データを示すことで、果梗捻枝の裂果率を低減させる効果が生産者に徐々に理解されています。

なお、果梗捻枝はペンチ等を使った処理であり、生産者にとっても作業負担になります。そこで、愛知県の現場フィールド活用型イノベーション推進事業を活用し、省力的に作業できる器具の開発を進めています。来シーズンは、その器具の実用性を検証する予定です。

果梗捻枝の技術

スプレーギクのスポットクーラーを利用した育苗技術

スプレーギク栽培では、ソイルブロックと呼ばれるブロック型の培土にキクの穂を挿して苗を作ります。近年、夏季の異常高温により育苗中に苗が枯れるなどのロスが発生し、それに伴って作付計画が乱れる問題が生じています。

そこで、苗のロス削減のために、実証農家1戸でスポットクーラーを用いた育苗試験を行いました。支柱とポリフィルムで作ったトンネルの内部に、穴をあけたビニルダクトを設置し、冷気を送風することで冷房して、8月の高温期に1週間育苗しました。

冷房処理区のソイルブロックの培地温度は、慣行区より最大で 6.1℃、日中(10時から14時)の平均で 3.7℃低下しました。この結果、冷房処理区の苗は、慣行区よりも発根が良好で、苗質が向上することを確認しました。今後は、生産現場の規模に合わせた技術改良に取り組みます。

冷房処理区の様子

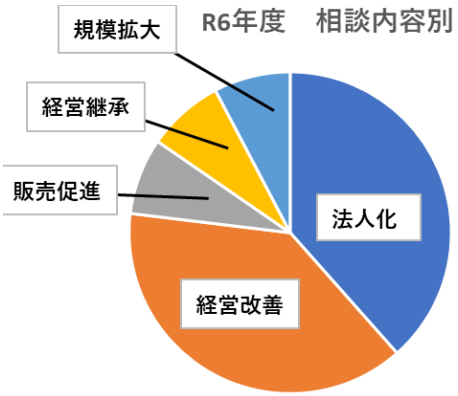
事業の紹介

農業経営・就農サポート推進事業による専門家派遣の実績

農業経営・就農サポート事業は、農業者の皆さんが抱える様々な課題の解決を支援するため、中小企業診断士、税理士などの専門家を無料で派遣する事業です。

2024 年度は 14 戸で専門家派遣を活用しました。相談内容は、法人化及び経営改善が多くを占めていました(右図)。作目は、野菜が最も多く、次に果樹でした。相談後のアンケートでは、多くの方が概ね満足したとの感想を頂いております。

本年度(12 月末時点)は6戸で派遣済み、2戸で今後派遣予定の状況です。



2024 年度相談内容

新たに農業経営士・農村生活アドバイザー・青年農業士に認定された皆様

2025 年 11 月 21 日（金）に愛知県県庁本庁舎で認定式が開催され、管内から 12 名の方が愛知県知事から新たに認定されました（敬称略）。

農　業　経　営　士

【豊橋市】
　大橋　史明（トマト）
　服部　道尚（デルフィニウム）
　福井　基紘（水田作）
【豊川市】
　山本　明広（キャベツ、ハクサイ他）
【蒲郡市】
　石川　秀興（イチゴ）
　兼子　直之（イチゴ）

青　年　農　業　士

【豊橋市】
　高橋　和大（ミニトマト）
　小嶋　大揮（キャベツ）

農村生活アドバイザー

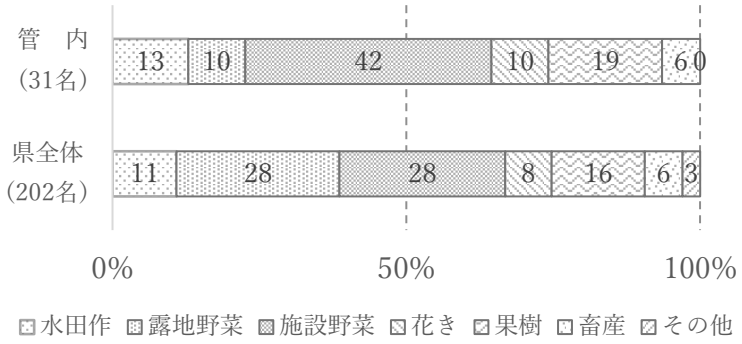
【豊橋市】
　伊藤　ひかる（コチョウラン、シンビジウム）
【豊川市】
　竹内　美幸（ジャガイモ、タマネギ、アスパラガス）
【蒲郡市】
　近藤　一江（温州ミカン）
　小田　弥生（温州ミカン）

写真　認定式の様子（左から農業経営士と青年農業士、農村生活アドバイザー）

2025 年度の新規就農者数

管内３市（豊橋市、豊川市、蒲郡市）の新規就農者数は 31 名です。部門別で見ると、施設野菜と果樹の２部門で約６割を占めており、県全体と比較して割合が高くなっています（右図）。

就農の経緯は、新規学卒が 10%（県全体９%）、Uターン就農が 42%（同 30%）、新規参入が 48%（同 61%）です。県全体と比較してUターン就農の割合が高いことが特徴です（データ省略）。



2025 年度の新規就農者数の部門別割合

※　「普及課だより」は、2026 年４月号から紙面の配布を終了し、WEB またはメールの配信のみとさせていただきます。